

物見窯は焚口部（送風部）があり天井部構造をもつ平窯である。窯式からみれば、七窪が古く、物見が新しいという年代の前後関係が成立つ。七窪窯跡群では小形品である杯類だけでなく、瓶・甕など大形品もある。物見窯は小形品が多いが丸底のタタキのある甕もある。したがって本段階では小形品だけでなく、大形品も依然として焼成したものであろう。年代の手がかりはないに等しい。

遠距離になるが、山形県東置賜郡川西町にある道伝^(註7)遺跡から出土した寛平8年(896)の木簡が伴ったS D01の4層上と4層下の土器群をみってみる。4層上面からは須恵器の杯が4点、高台皿が1点、両黒・内黒土師器の高台杯3点などがある。須恵器・土師器ともに回転糸切りである。4層下面の須恵器杯は回転糸切り5、回転ヘラ切り1、不明1である。これらの土器の高径指数と外傾度は、物見窯Ⅲ類と七窪窯Ⅰ類と重なる範囲が大きいことがわかった。このような観察から、9世紀末から10世紀初頭の土器は、底部の切り離しは回転ヘラ切りから回転糸切りにほぼ移行しており、杯類土器の組成も『郷土館窯土器段階』から『物見窯土器段階』に移っている様相を示しているようである。したがって『物見窯土器段階』は9世紀後葉が前段階との接点であり、10世紀前半までの期間が操業期間となろう。

2 横手盆地の古代土器

横手盆地における奈良・平安時代の集落遺跡出土土器のなかで、発掘調査による良好な資料となると、きわめて少ない。遺構内出土土器であっても、同一時期を確定する床面出土資料となると、さらに僅少である。ここでは、古墳時代から奈良・平安時代の資料を紹介し、発掘調査によって遺構内出土と判断された一括資料を取上げて、年代比定を試みることにする。

(1) 横手市オホン清水遺跡 (第56図)

遺跡は横手市塚掘字オホン清水にある^(註8)。秋田県では最も古い須恵器(834)が出土している。短脚の有蓋高杯で、脚部の3箇所にある長方形の透しは配置が不均整である。おそらく、5世紀末・6世紀初頭の製品であろう。

(2) 上野遺跡 (第56図)

遺跡は大曲市高関上郷字上野にある。水田開墾中の出土品で、同一期の可能性が大きい。概 要
土師器・杯(835)は非クロロで黒色処理されていない。体部全体が丸味をもつ丸底であり、口唇部が小さく外反するように挽き出されている。口縁部外面はナデ、体部はケズリ

→ハケメ→ヘラミガキであり、内面はハケメ→ヘラミガキの工程をへている。須恵器・杯 (836・837)の底面の切り離しは回転ヘラ切り、無調整である。836は口径12.1cm、器高3.05cm、高径指数25.2、外傾度30°であり、836は口径13cm、器高3.0cm、高径指数23.1、外傾度29.5°である。土器の年代は8世紀代におさまるであろう。

(3) 狙半内遺跡 (第56図)

概 要 遺跡は増田町狙半内にあり、須恵器は同一地点の出土と伝えられる。^(註9)蓋 (838) は天井部に回転ヘラ切りの痕跡がのこり、のち回転ヘラケズリ、ナデの調整をおこなっている。口縁部は端部を丸く、内傾する「かえり」がつく。「かえり」は、粘土から挽き出したものではなく粘土紐を貼り付けたようすがわかる。高台杯は磨滅が激しく調整などは不明である。土器の年代は8世紀前半代におさまるのではなからうか。

(4) 下藤根遺跡 (第54・55図)

概 要 遺跡は秋田県平鹿郡平鹿町中吉田字下藤根^(註10)にある。全部で8軒の竪穴住居跡が調査され出土遺物・規模・形状・内部施設から検討した結果として3期にまとめられている。

第Ⅰ期の土器 (801~812)

土師器杯 (801~804) は外面体部下半に段をもち、口縁部にわずかに内弯し、丸底で内面黒色処理されている。器面調整は口縁部内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが、内面は外面の段に対してわずかに器壁が薄くなる部分より下に、底面の中心に向けて放射状のヘラミガキが施され、外面下半にもヘラミガキが施されている。801は口縁部中央および底部外面にあらひハケ目痕が残っている。須恵器杯 (805) は体部内外面にロクロ痕があり、底部は回転ヘラ切りされており、切り離し部分と体部との境界は粘土が残っている。全体に丸味をもち、丸底風である。高径指数29.9、口径13.2cm、外傾度23°。土師器杯 (806・807) は内面黒色処理されている。体部は丸味をもち、平底に近い丸底である。器面調整は口縁部内外面にヨコ方向のハケ目をのこし、ヨコ方向のヘラミガキ、体部内外面にこまかいヘラミガキを施している。高杯は2種類ある。808・809は杯部の内縁部が内弯し、体部下半に段をもつものともたないものがある。脚部は上半がせばまる筒形で裾が「ハ」の字状にひろがる。器面調整は杯口縁部は内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが、内面下半は中心にむけて放射状のヘラミガキが施され、黒色処理されている。811の杯体部は内弯ぎみにひろがり、中位が角ばり口縁部が短く内弯する。器高調整は内外面ともにヨコ方向のヘラミガキが施されている。この他、土師器の壺 (810)、甕 (812) などがあり底面に木葉痕が付いている。

第Ⅱ期の土器 (813~815)

須恵器杯はいずれも体部と底部の境界がはっきりせず丸味をもち、無調整である。底面

の切り離しは回転ヘラ切り（813・815）と回転糸切り（814）とがある。土師器の甕は頸に小さな段をもつものである。

第Ⅲ期の土器（816～823）

土師器・須恵器杯（816～819・822）はいずれも回転糸切り、無調整である。土師器鉢（820）の口縁部内外面はヨコナデ、胴部外面は上半にタテ方向のハケ目、下半はヨコ方向のハケ目があり、底面は木葉痕をもつ。土師器甕（821・823）はロクロ成形である。

各期の年代は、第Ⅰ期が8世紀中葉、第Ⅱ期が9世紀前葉、第Ⅲ期が9世紀代におさまる範囲と位置づけておきたい。

（5） 中藤根遺跡（第55図）

遺跡は平鹿郡平鹿町中吉田にある。^{（註11）}

概要

第1号住居跡出土土器（824）

土師器杯（824）は体部外面中央部に段があり段の下1cmのところまでハケ目がタテ方向にみられるが、その上に全面ヘラミガキがなされている。内面はきめ細かいヘラミガキを施している。非ロクロで内面黒色処理されている。

第2号住居跡出土土器（825～829）

土師器は杯と甕、須恵器は杯だけである。土師器杯（825）は、非ロクロで底面は木葉痕で、体部下端に手持ちヘラケズリがなされている。須恵器の杯（826～828）はいずれも体部と底部の境界がはっきりせず丸味を持ち、無調整であり、底面の切り離しは回転ヘラ切りである。法量は高径指数24.4～26.2、口径13.2～14.5cm、外傾度29～35°である。

第3号住居跡出土土器（830・831）

杯（830）は土師器で非ロクロであり黒色処理されていない。甕（831）は外面は幅1cmのハケ目で、上・下から調整されている。

B区竪穴遺構（832・833）

土師器杯（833）は非ロクロ成形であり、平底である。外面は全面回転ヘラケズリ、内面はきめ細かいヘラミガキであるが、黒色処理はされていない。須恵器杯（832）の底面の切り離しは回転ヘラ切りで、体部下端から底部にかけて指（布）による調整がある。

各遺構の年代は第1号住居跡出土土器は8世紀前葉、第3号住居跡出土土器・B区竪穴遺構出土土器は8世紀後葉、第2号住居跡出土土器は、8世紀末・9世紀初頭に位置づけておきたい。

（6） 平鹿遺跡（第56図）

遺跡は平鹿郡増田町増田字平鹿にある。^{（註12）}平鹿遺跡の平安時代の遺構は灰白火山灰に覆われており、また土器の組成にも大きな相違がないため、同一期の所産と考えても大過ない

概要

と判断している。土師器には杯・鉢・甕・鍋などがあり、須恵器は甕がある。杯類土器の底面の切り離しは、すべて回転糸切りである。特徴のあるものだけを取り上げたい。土師器杯(840)の法量は、高径指数26.4、口径13cm、外傾度48.5°である。杯(845)は非クロロで内面黒色処理されている。底面には木葉痕があり、体部下端は手持ちのヘラケズリがある。

灰白色火山灰 平鹿遺跡の遺構群を覆っていた灰白色火山灰は、分析の結果、宮城県内に降灰している灰白・白土層と呼称しているものと同種の火山灰と同定されている。灰白色火山灰は貞観12年(870)以降、承平4年(934)間の降灰といわれ、およそ10世紀前半頃の年代をあてている。ただし、灰白色火山灰は複数降灰の可能性があり、鍵層とならないという意見もある。

年 代 本遺跡出土土器の年代はおおよそ9世紀後半から10世紀初頭におさまるようであり、灰白色火山灰との年代観の間には大きな差はないと見ておきたい。

(7) 内村遺跡 (第57図)

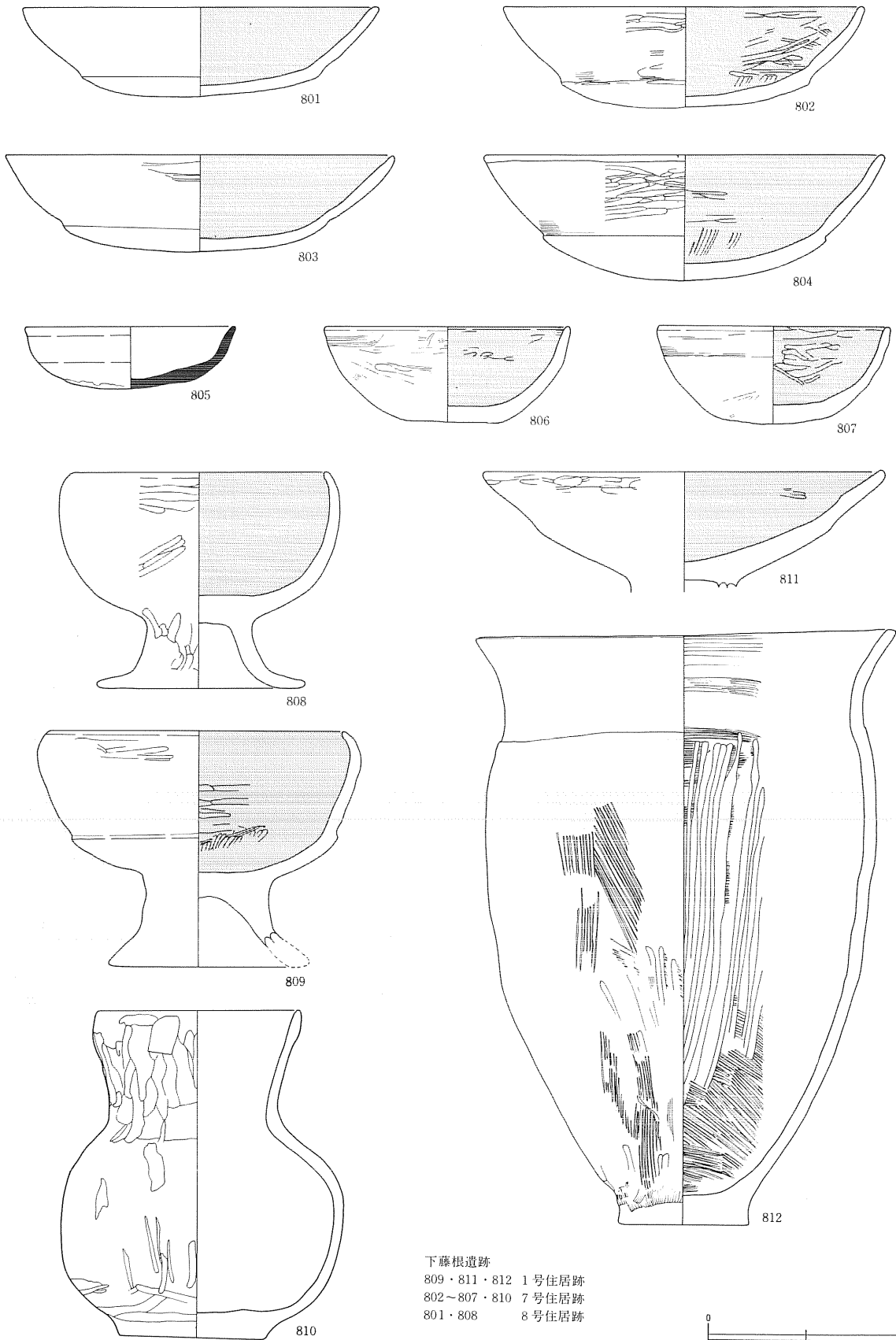
概 要 遺跡は仙北郡千畑村千屋字内村にある^(註13)。平安時代の遺構であるS K16に一括廃棄された土器である。ここではS K16から出土した土器を一括に取扱う。土師器は杯・皿・台付皿・托・碗・鉢・甕・鍋などがあり、黒色処理された土師器には杯(「深碗」が適切かもしれないが、ここでは杯としておく)、須恵器は長頸壺・甕などがある。遺跡内からは施釉陶器、和鏡も出土している。杯類土器の底面切り離し技法は、すべて回転糸切りである。皿・台皿(852~856)としたものの中には托(854)とみたいもののほか、高台のつくもの(857)がある。杯(858~863)の法量は、高径指数28.1~41.1、口径12.1~14.1cm、外傾度27~38.5°である。黒色処理された土器は内面処理・両面処理があり、高台を付すものもある。865・866は外体面は回転ヘラケズリのあと横方向のヘラミガキが、864・870は体外面が横方向のヘラミガキ、867は体部下端の一部に手持ちヘラケズリがある。872の体外面と体部下端に手持ちヘラケズリのあと、横方向のヘラミガキがある。いずれも、体内面の上半が横方向、下半は放射状のヘラミガキがある。高台には角高台(868・869・871)、直線的で高い高台(872)など新旧の要素が混じっているようにもみえる。無高台杯(864~867)の法量は、高径指数30.8~34、口径12~14.1cm、外傾度27~35°である。施釉陶器は緑釉である。875は京都産で、製作年代は10世紀前半、876は美濃窯東濃産で、製作年代は9世紀末~10世紀初頭におさまるであろう。和鏡は「端花鳳凰八稜鏡」で、10世紀中頃から11世紀代にかけて製作され使用されたものであろう。

緑 釉 陶 器 本遺跡出土土器の年代は、杯類土器を見るかぎり時間差をもつようにみられるが、一括廃棄した出土状況や質感から見ると時間差は感じられない。また、緑釉・和鏡なども併せ

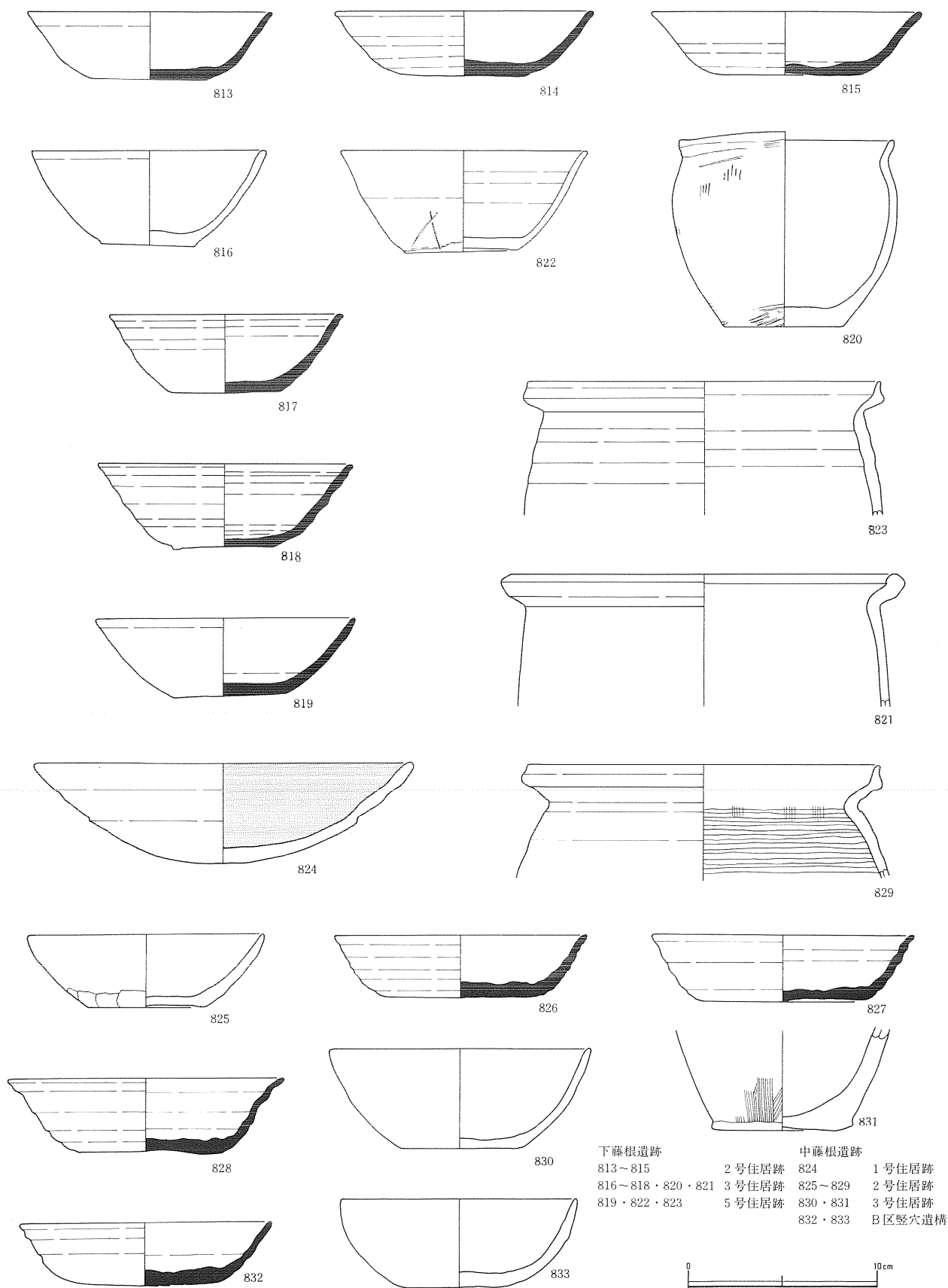
和 鏡 考慮せざるをえないだろう。したがって、本遺跡出土土器の廃棄年代は10世紀中葉から後葉にわたる時期と位置づけておきたい。

年 代

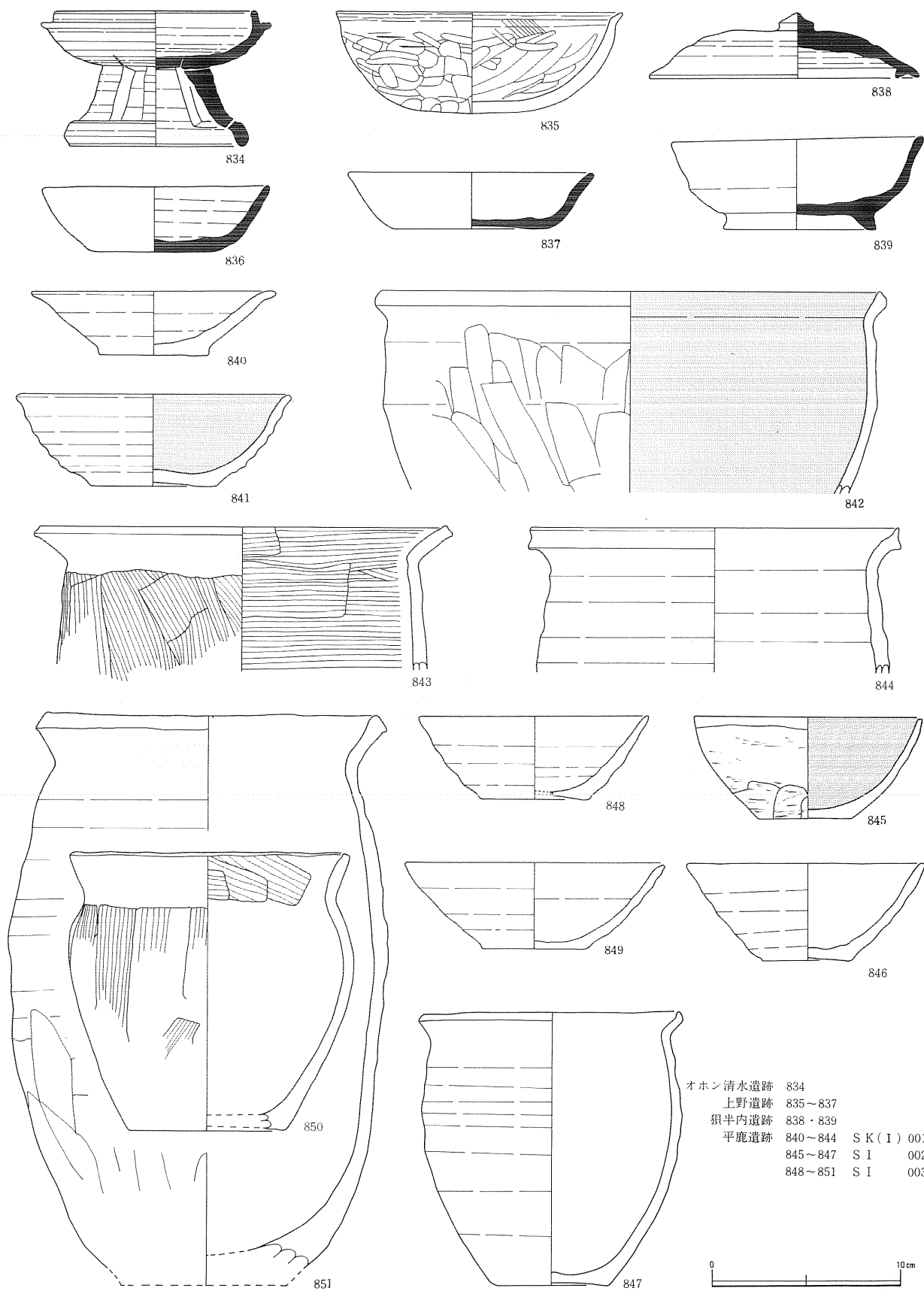
古代の地名 内村遺跡の南側は大畑部落である。オバタケは古代の御畑を意味する地名ではなかろうか。当地点は千畑村安城寺にも近く、古代山本郡定額寺「安隆寺」の可能性をもつであろう。



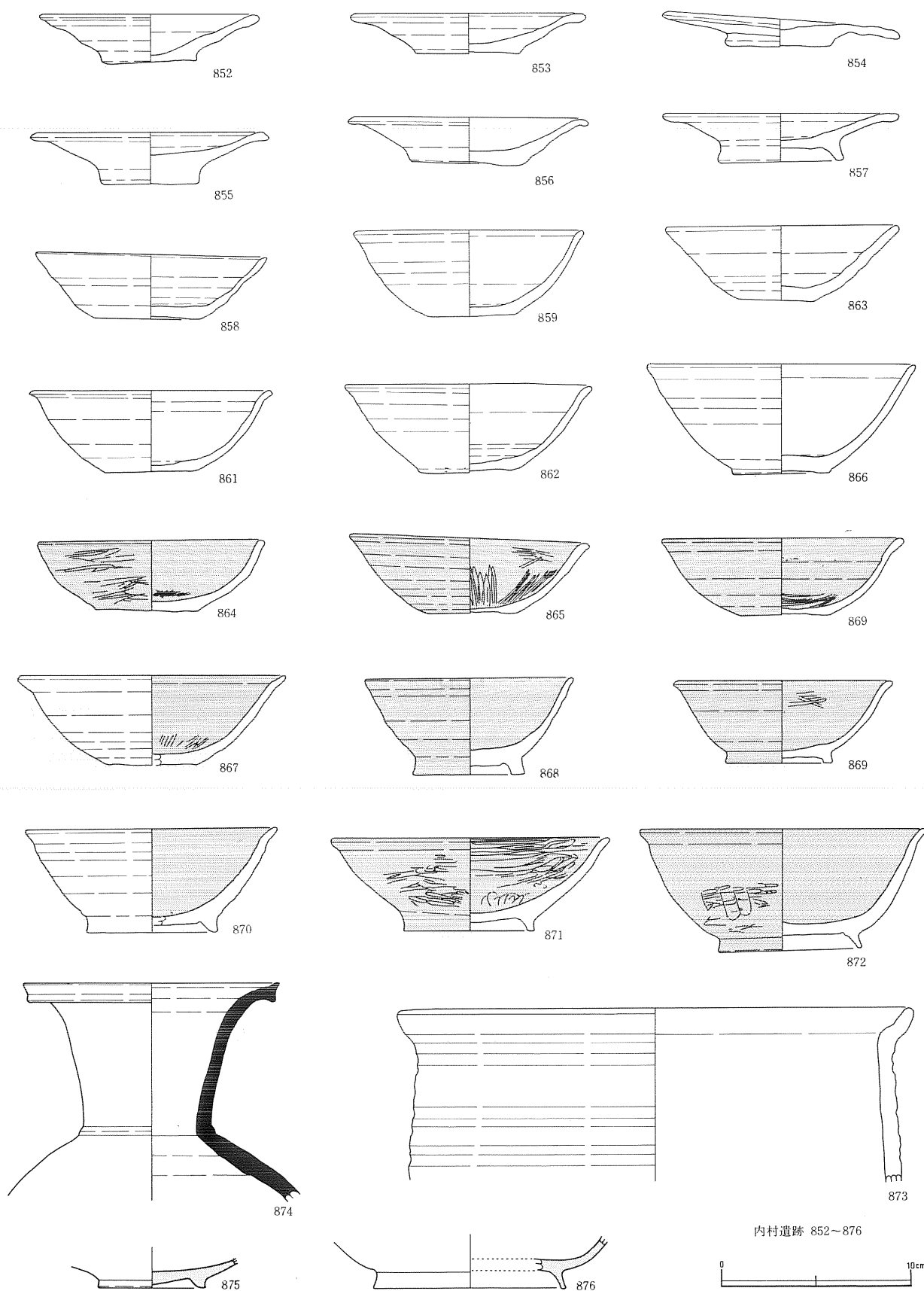
第54図 横手盆地の古代土器(1)



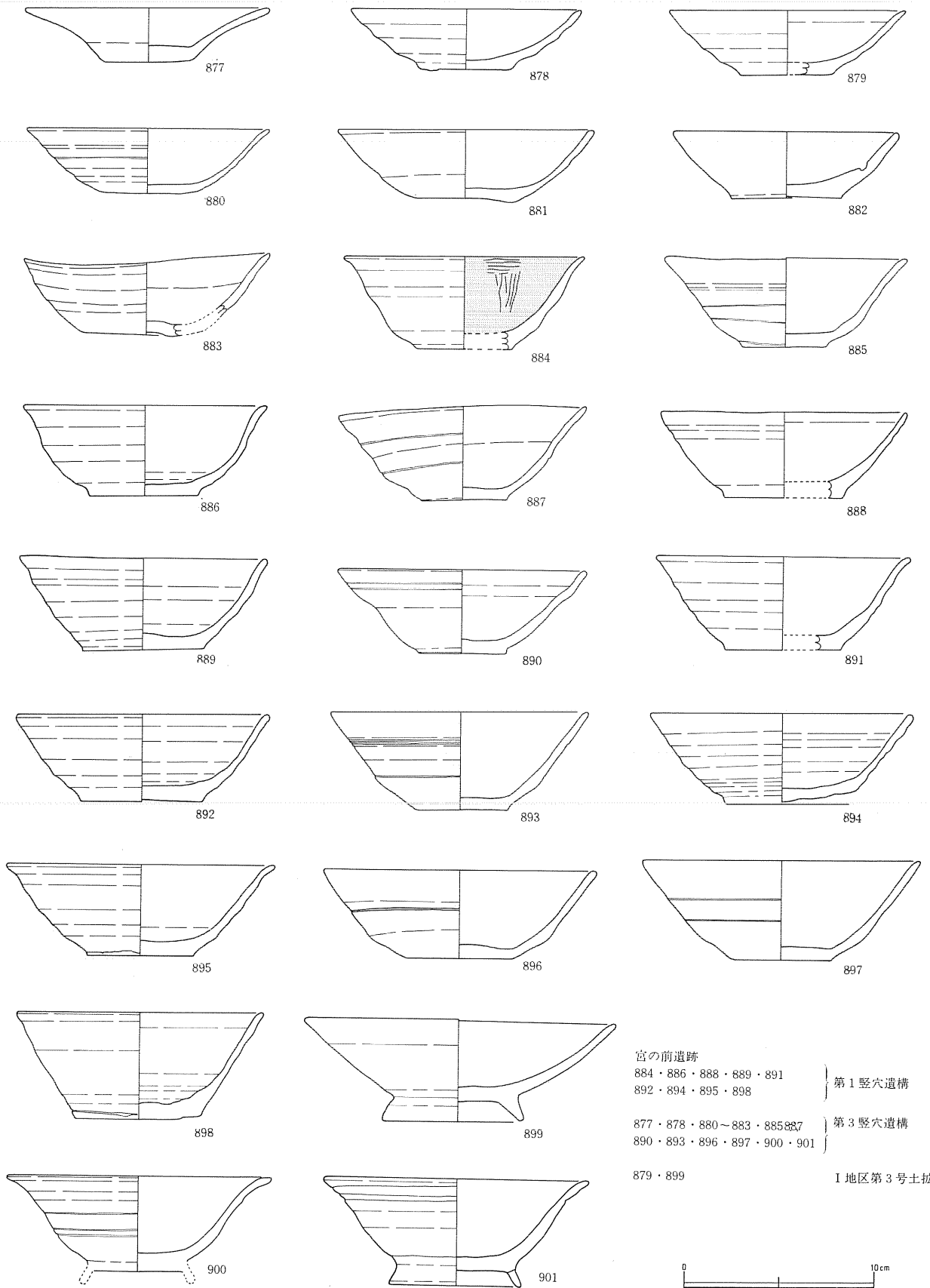
第55図 横手盆地の古代土器(2)



第56図 横手盆地の古代土器(3)



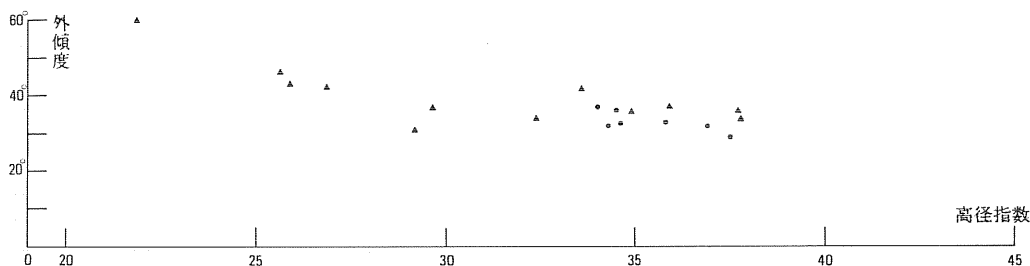
第57図 横手盆地の古代土器(4)



第58図 横手盆地の古代土器(5)

(8) 宮の前遺跡 (第58図)

- 概 要 遺跡は雄勝郡稲川町八面字宮の前にある。^(註14)土器焼成施設と考えられる竪穴遺構が数多く発見されている。第1竪穴遺構からは赤褐色・明褐色を呈し、底部に回転糸切り痕をもち無調整の土師器・内黒土師器と須恵器甕が出土している。ここでは時間差の少ないと思われる第1・3竪穴遺構と第3号土壇出土土器を一括に扱うことにする。第Ⅰ類(877) 高径指数21.8、口径12.8cm、外傾度60°。第Ⅱ類(878~881) 高径指数25.6~27.4、口径12.1~13.4cm、外傾度42~46°。第Ⅲ類(882・883) 高径指数29.2~29.6、口径11.8~13cm、外傾度31~37°。第Ⅳ類(884~897) 高径指数33.4~38.8、口径12.6~14.6cm、外傾度29~42°。第Ⅴ類(898) 高径指数43、口径13cm、外傾度28°。高台杯は杯部がわずかに外反気味の口縁部をもつもの(900・901)と内弯気味の口縁部をもつもの(898)に分けられよう。
- 年 代 本遺跡出土土器は内村遺跡の次段階に位置づけることができよう。とくに器高の低い皿やいわゆる足高高台をもつものが特徴である。したがって、本遺跡の土器の年代は10世紀後葉以降の年代と位置づけておきたい。



第59図 宮の前遺跡竪穴遺構 (●第1竪穴遺構, ▲第3竪穴遺構)

3 払田柵跡の基準土器

① 第6次発掘調査において、S I 27竪穴住居跡から出土した共伴資料である。S I 27の土器はカマド、貯蔵穴と床面から出土している。9世紀前半の共伴資料である。

SI 27の土器 (1) S I 27出土土器 (第60図)

土師器 401はロクロ成形で丸底風を呈し、底面の切り離しは回転ヘラ切りで、体外面・底面はていねいなヘラミガキを施している。高径指数41.1、口径10.7cm、外傾度21°。402はロクロ成形で底面の切り離しは回転糸切りで、調整はない。高径指数32、口径12.8cm、外傾度32°。403は丸底の甕の底部で平行タタキ目が不定方向に走っている。

須恵器 蓋(403)は天井部に回転ヘラケズリがのこり、擬宝珠形のつまみがつく。口縁部は外反する平坦面づくり、端部は垂直にひき出している。